

令和6年度 学校評価報告書

本園の教育目標

1. 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
2. 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。
3. 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。
4. 日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。
5. 音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。

本年度重点的に取り組む目標

目標1. 子どもたちの体幹が強くなる。

目標2. 子どもたちが身近な自然や季節に興味を持ち、自身を取り巻く自然に関心を持つようになる。

目標3. 子どもたちが思いやりの心を持ち、人と関わる力を身につけるようになる。

本年度重点的に取り組む目標の達成状況（自己評価）

目標1：子どもたちの体幹が強くなる。

体幹の強さは、身体操作や姿勢の維持等の運動能力の土台となる要素である。今年度は、遊びや運動の中で意識的に体幹を意識した取り組みを行い、十分な成果があった。次年度も継続して重点的に取り組みたい。

#	評価項目	評価*	取り組み状況
1	園児の身体能力が向上するように、園児が意欲的に参加できる運動量の多い遊びを導入する。	A	体育指導の活動を基に運動強度が高い遊びを取り入れたり、自由遊びでも運動量のある遊びを園児たちに促してみたりして、身体能力の向上に努めた。 その結果として、年長組のボール投げと幅跳びの体力測定では、前年度と比べて大きな改善があった。

2	体幹の安定性を高められる動作を遊びに導入する。	A	体幹の安定性の向上を目的に、ブリッジや手押し車、フラフープ、ジャンプなどを遊びに取り入れた。インターネットで紹介されていた「クモ鬼ごっこ」も運動強度が高く、園児たちにとって非常に楽しい活動となった。こうした遊びや運動を意識的に導入した結果、園児の体幹の安定性には十分な改善があった。 一方で、体幹に関わる筋肉が十分に備わっていても、体幹が不安定な園児は一定数おり、今後はそうした園児に対してどのような支援ができるかを検討する必要がある。
3	座っている時や立っている時に正しい姿勢を維持できるようになる。	A	園児が座っている時や立っている時、担任が姿勢について声掛けをしたり、姿勢を維持する時間を競わせたりして、園児たちは正しい姿勢の維持を心掛けるようになり、全体的に姿勢を維持できるようになった。 長時間座っていられない、椅子から落ちてしまう園児が一定数いる。身体能力と体幹の安定性でなく、集中力等の他の要因によって姿勢の維持が難しい可能性が高く、個別の支援方法を検討する必要がある。

* 評価 (A:十分に成果があった B:成果があった C:少し成果があった D:成果がなかった)

目標2：子どもたちが身近な自然や季節に興味を持ち、自身を取り巻く自然に関心を持つようになる。

農園に行く頻度や花壇の花木や虫に触れる機会を積極的に増やし、幼稚園の自然環境に関わる教材の利用や製作活動の実施によって、園児たちの自然への興味と関心を高めた。一方で、行事との兼ね合いで活動時間が十分に確保できない時期もあったため、今後は年間の活動バランスにも配慮しつつ、時間が確保できないなかでもどのように工夫して興味と関心を維持するか検討する必要がある。

#	評価項目	評価*	取り組み状況
1	農園の作物や草木、虫に園児が興味を持てるように農園を探索する頻度を増やす。	A	農園に行く機会や散策の時間を意図的に設け、農園を探索する時間を増やした。農園以外でも、ミニトマトとサツマイモの観察画を行い、作物をじっくり観察する時間を作って、園児の興味を深めた。 農園に行く前には教材や遊びを通して作物と収穫について説明し、園児たちの期待を高めることも効果的であった。 課題として、2学期は行事が多く、農園で活動する十分な時間を確保できないことがある。

2	花壇の草花や園庭の樹木等、幼稚園の自然環境に園児が興味を持つような活動を導入する。	A	幼稚園の自然環境に園児が興味を持てるよう、様々な活動が行われた。園児は園庭で捕まえたカタツムリやダンゴムシを図鑑で調べたり、教室で飼育したりすることで、生き物への関心を深めた。また、園内の生物に関する絵本を読み聞かせることで、園児たちは生物に親しみを持つようになった。 花壇の植物について、担任が積極的に観察し、発見したことを園児に伝えることで、担任の楽しそうな様子に影響され、園児の関心も高まった。 例として、年長組では樹木と木の実を使って迷路を製作し、その触感や質感を楽しみ、細部を観察する活動を行った。自然に関わる製作を楽しむことで、自然に対する親しみを深めた。
3	自然の観察や教材の利用、遊びを通して、季節毎の自然の変化に関して園児が理解と興味を深める。	B	幼稚園を取り巻く自然の変化があった時、担任が積極的に変化を共有したり、気付けるように促したりすることで、園児たちは季節ごとの自然の移り変わりに対して興味を持つようになった。 例として、2歳児クラスではテラスから屋外を観察する機会を多く設けたことで、空の色や雨の音等に関心を向けるようになった。年中組では、降雪時に雪を教室に運び、その冷たさと触感を体験したり、寒い時には霜柱を触ったり踏んだりして、冬特有の自然の不思議さと楽しさを感じられるようにした。

* 評価（A:十分に成果があった B:成果があった C:少し成果があった D:成果がなかった）

目標3：子どもたちが思いやりの心を持ち、人と関わる力を身につけるようになる。

園児たちが他者と関わるきっかけとなる挨拶や異年齢交流を通して、思いやりの心や関わる力を育む取り組みを行った。学年や活動内容によっては、教材や伝え方にさらなる工夫の余地があるが、全体として園児の思いやりや関わりの力は着実に育っていた。

#	評価項目	評価*	取り組み状況
1	園児が他者と関わるきっかけとなる挨拶を意欲的に行えるように、教職員が率先して園児に挨拶を行う。	A	教職員の積極的な挨拶によって園児が挨拶を行うようになった。遠足等で園外に行った時、園児たちが施設の職員に自ら挨拶したり、普段会話しない園児同士が挨拶をきっかけに話し始めたりする様子から、挨拶の習慣が人との関わりを生み出すきっかけとなっていた。

2	園児が年齢の低い子を世話したり、気遣ったりして、相手から感謝されたり好意を向けられたりすることで、思いやりの良さに気づけるように、異年齢の園児たちと交流する時間を設ける。	B	他学年と一緒に園庭や遊具で遊んだり、他学年の教室に遊びに行ったりする頻度が増えた。年長組の園児たちから下の学年の園児たちに関する話題が増えたことから関心が高まった様子が見られた。 人数の多い学年同士で遊ぶ場合、遊ぶ場所のサイズによっては混雑によりケガのリスクが高まり、交流を控えることがあった。
3	園児が人以外の動植物にも思いやりの気持ちを抱けるように、園児が植物や飼育動物に接する機会を作る。	C	園児が捕まえてきたカタツムリとダンゴムシを教室で飼育しようとした。ダンゴムシは飼育しなかったが、園児と動植物が触れ合う機会を作る試みがあった。 今年度は、園外活動で動物と触れ合える施設を多く訪れたこともあり、園外で動物と接する機会が多かった。 モルモットへの餌やりの頻度は減少した。餌やりはアドベンチャー遊具での遊びとセットになっているが、大人数のクラスでは遊具のサイズが小さいため、使用頻度が下がり、それに伴い餌やりの頻度も減った。また、モルモットの個体数が少ないため、少ない餌の取り合いを防ぐために餌やりを控える傾向があった。 水槽については、園長による餌やりのタイミングが登園バスの到着時刻と重なることが多く、登園バスを利用する園児の関心は高かったが、バスを利用していない園児の関心は比較的低かった。今後は、水槽の生き物に対する興味を全園児に広げられるような働きかけを検討する必要がある。

4	感情表現や思いやりをテーマにして、担任が絵本を読み聞かせたり、説明の時間を保育中に設けたりするなどして、園児が感情表現と思いやりを学ぶ機会を作る。	B	担任が園児たちに感情表現や思いやりについて説明する際、教材や伝え方を工夫することで、園児たちはより興味をもって聞き、実践するようになった。 例として、年長組では思いやりについて特集している絵本の月刊誌を活用して、場面に応じた行動についてクラス内で話し合った。その結果、園児たちは悲しんでいる友達に話しかけたり、喧嘩の仲裁に入ったりするようになり、感情表現と思いやりを実践する様子があった。 2歳児クラスでは言語能力が未発達なため口頭での伝達が難しく、指人形や絵等の視覚的な教材を用いたところ、理解の深まりに効果があった 学年によって伝え方の工夫に差があったため、今後はさらに工夫を凝らすことで、感情表現や思いやりの学びをより効果的に促せると感じた。
---	---	---	--

* 評価（A:十分に成果があった B:成果があった C:少し成果があった D:成果がなかった）

総合的な評価結果

目標1については、おおむね達成できた。幼児の体力の低下が心配される状況下では、バランス、大きな動き、小さな動き、調節する動きなどの要素を持った様々な動きが、結果として体幹を強くすることに繋がると思われる。今後も継続して取り組んでいってください。

目標2については、達成されている部分もあるが、もっと子どもたちの興味や関心を高め、自ら気付いたり、発見したりする機会を設け、それをより深く考察するような工夫があるとよい。

目標3については、人と関わる力を身につける部分で達成度が低いと思われる。人と人が一緒に一つのことに取り組む過程でのやり取りの中で、子ども自身が他者の思いに気付いたり、考えを共有したり、試行錯誤する中から育ってくるものと思われる。保育者はそのような設定や環境を提供し、それを見守りながら適切な援助をしていくことが必要ではないかと思われる。人と人が一緒に物事に取り組むことが楽しいと感じることを大切にしながら、取り組んでいってください。（園長）

学校関係者評価委員会の評価

- 幼稚園での取り組みを通して、子どもは自然の生き物に興味をもち、さまざまな発見や学びがあり、家庭でもその話をよくするようになった。
- 幼稚園で飼育しているモルモットに興味をもち、自分から餌を持っていく姿が見られた。ただし、餌をあげられなかった日は残念がっていた。
- 入園前は虫が苦手で触れなかった子どもが、園での活動を通して虫に興味をもち、触れるようになった。
- 先生は、言葉だけでなく絵やカードなど視覚的にわかりやすい方法を用いて、子どもに伝える工夫をしていた。

次年度重点的に取り組む目標

#	目標	達成のための取り組み/評価項目
1	思いやりの気持ちをもって、他者と関わる。	● 子どもたちが思いやりのある関わり方を学べるように、日々の生活の中で先生が関わり方の手本を示す。 ● 人との関わりの中で思いやりの気持ちが相手に伝わるように、コミュニケーション能力が成長する機会を作る。 ● 異年齢の子ども同士の交流を通して、年長児が年下の子を気遣って関わり、年少児が年上の姿に憧れをもって関わろうとする中で、思いやりの気持ちが育まれる機会を作る。
2	自然の中にある生物の命を大切にする。	● 身近な自然や生物に関心を持ち、観察や飼育を通して命の大切さに気づく。 ● 生物との接し方を学んだり、実際に生物と関わる体験を重ねたりすることで、命を大切にし、思いやりの気持ちをもって接する態度が育つ。
3	健康な体を育む一環として、食べ物に興味を持ち、食事を楽しめるようになる。	● 給食に使われている食材について学び、興味を持つ。 ● 農園で育てた野菜や果物に親しみを持ち、栽培と収穫、調理を通して食事の楽しさを感じられるようになる。